

紹介

浅見和彦・伊東玉美・内田淳子・鳶尾和宏・松本麻子編

『古事談抄全釈』

浅見和彦・伊東玉美責任編集

『新注古事談』

木下華子

平成二二年に入って、浅見和彦・伊東玉美両氏を中心とした研究者により、『古事談』に関する二つの注釈書、『古事談抄全釈』『新注古事談』が刊行された。この二冊は、平成二〇年に刊行された論文集『古事談』を読み解く（浅見和彦編）に引き続くものであり、いわゆる『古事談』三部作を成すものである。以下、『古事談抄全釈』『新注古事談』の順で、その内容を紹介することとしたい。

まず、『古事談抄全釈』の構成に触れておこう。全体は、『古事談抄』各話の注釈（釈文／本文／校異／口語訳／語釈／余説／同話・類話／参考文献）、『古事談抄』解説（『古事談』について／『古事談抄』について／『古事談抄』と『古事談』の本文について／主要参考文献）、穂久邇文庫蔵『古事談抄』（書誌及び影印）から成り、末尾に人名・地名・神仏名等索引を付す。また、本書刊行に至る経緯は「あとがき」に述べられる如くであるが、成蹊大学中世文学研究会での輪読の成果である「『古事談抄』選釈」（成蹊人文研究）13（17号、平成17（21年））をもととし、大幅に補訂・加筆が施された上で、前出の五氏が責任編集に当たったものである。

さて、本書によって初めて全釈が施された穂久邇文庫蔵『古事談抄』は、その名が示す通り、『古事談』からの抄出本である。もととなった『古事談』は、鎌倉時代初期、源頼兼によって編まれたとされる説話集であり、第一「王道后宮」、第二「臣節」、第三「僧行」、第四「勇士」、第五「神杜仏寺」、第六「亭宅諸道」の六巻から編成される。広本系第一種とされる説話の全条を備えた伝本では、全体で四六〇話前後の話を収めているが、このうちの第二「臣節」を編纂資料とし、それからの抄出・抜書性格を持つ説話集が、『古事談抄』なのである。従って『古事談抄』は、『古事談』諸本全体の中に位置づけるならば、零本と言うべき写本ではあろう。しかし、特筆すべきは、その書写年代と本文における古態性、さらに『古事談抄』自身が抄出・書写に際して独自の論理や方法を持ち、一つの小さな説話集として独立した性格を有している点である。以下、本書の解説を参看しながら、摘記してみよう。

現在確認しうる『古事談』の写本は、その全てが江戸時代以降のものである。対して、『古事談抄』は唯一中世に遡る写しであり、その紙背文書からは南北朝から室町初期の範囲に書写時期を設定することが可能かと考えられている。加えて、注目すべきは、現行の『古事談』には見られない一話（第一四話「忠実、顕雅に感ずる事」）を持つことであろう。もちろん、書写年代の古さがそのまま古態性を保証するものではないわけだが、本書では、『古事談抄』が本文の上で『古事談』諸本よりも古態をととめると考えられる例が報告されている。先述の独自説話も、その内容の上から、また

『古事談』第二「臣節」には逸文の存在が確認されることと相俟つて、原『古事談』第二に存在した逸話だとの推定が可能なのである。即ち、『古事談抄』とは、『古事談』諸本において大変重要な古写本であり、テキストクリティックにおいても大きな意義を持つものだと言える。

また、『古事談抄』は、『古事談』第二からの抄出本という枠内に収まらぬ性質を持つ。まず、本書では、『古事談抄』の各説話において要約や叙述の明確化を行う傾向があることが指摘されている。

加えて、『古事談抄』における説話の配列は『古事談』第二の配列とは大きく異なるのだが、「撰関家まつわる話↓他家まつわる話↓女性にまつわる話」というまとまりが二回循環するという『古事談』第二の構造は、そのまま受け継いでいるのである。ここから理解されるのは、『古事談抄』編者が『古事談』第二の編集方針を踏襲し、説話の抄出と配列における自らの方法としたことであろう。つまり、『古事談抄』という作品は、中世における『古事談』享受の有り様を示すものであることと同時に、作品の読み手が作り手へと転移してゆく様相を現出させたものだと考えられるのだ。中世文学の一作品としても、享受と創出とが緊密に連鎖し合う作品生成の場という意味においても、実に興味深い作品として『古事談抄』は考えられるのであり、本書の刊行はその理解への大きな階梯なのである。

続いて、『新注古事談』であるが、こちらは先に述べた『古事談』全六巻の注釈書である。全体は、作品解説に当たる『古事談』に

ついて、第一から第六各話の注釈、参考文献、人名索引、類話一覧から成る。注釈は分担執筆であり、第一を伊東玉美、第二を葛尾和宏、第三を土屋有里子・木下資一・伊東、第四を浅見和彦・高津希和子、第五を内田滂子、第六を山部和喜・松本麻子・高津の各氏が担当し、全体を浅見・伊東両氏が調整されている。底本は慶應義塾大学図書館蔵『古事談』を用いているが、本文は助詞・助動詞を平仮名に改めた書き下し文となっており、カギ括弧やルビが補われるなど、大変読みやすいものとなっているのが特徴である。また、凡例に示されるごとく、頭注は見開きの中に収められ、平素・簡明が第一とされている。『古事談』の先行注釈書はいくつか存在するが、このような簡便なテキスト版としての注釈書は初の試みであり、なかなか読みにくい『古事談』という作品の間口を広くしたものと言える。

紙幅の関係もあり、十分な言及を尽くせたとはいえないが、両書は、今後の『古事談』研究、説話文学研究、そして中世文学研究において確かな礎となるものであろう。その礎は、また、新たな研究を拓くに違いない。そのような予感呼び起こすものとしての両書を考えつつ、拙い紹介の筆を擱くこととする。

『古事談抄全釈』平成二二年三月三一日発行 A5判 五二〇頁
一三〇〇〇円 笠間書院

『新注古事談』平成二二年一〇月三〇日発行 A5判 三五二頁
一八〇〇円 笠間書院

(きのした・はなこ 本学非常勤講師)